

## 二〇年代北京・モダン・恋愛——盧隱『象牙戒指』再読

鄭 洲

### 一 はじめに

盧隱（一八九九—一九三四）の『象牙戒指』（一九三四）は、悲恋小説として知られているが、北京の風物やモダンな振る舞を数多く写し取っている点が大きな特徴と言える。当時の時代や風物を想起させる描写は、本作においてどのような役割を果たしているのか。さらに、本作は盧の親友石評梅（一九〇二—一九二八）と高君宇（一八九六—一九二五）との悲恋を題材とした長編小説で、モデルは石評梅とされるが、作者自身の姿も見出すことができるのではないだろうか。本稿では、以上の問題に着目して『象牙戒指』を再読し、盧隱文学の価値を再考する。

### 二 『象牙戒指』の成立とあらすじ

一九三一年、盧隱は二番目の夫李唯建と東京で数ヶ月間滞在した後、帰国して杭州の西湖に住み、六月から『象牙戒指』を『小説月報』に連載し始めた。八月から上海に移り、小説の創作を続けた。『象牙戒指』は全二十章のうち十七章が連載されたが、一九三一年

の第一次上海事変で商務印書館が焼失。その後、残りの三章を書き足し、一九三四年五月にようやく商務印書館より単行本を出版した。<sup>(一)</sup>

舞台は北京である。十七章の半ばまでは故人となった主人公の友人素文、残りの部分は同じく友人の露莎、二人の会話と語りの形で書かれ、さらに書簡、日記などが挿入されている。山城の女学生張沁珠は勉学のために北京に来た。彼女は同行していた同郷の伍念秋と恋に落ちる。が、後に伍には妻子がいることを知り、そして伍の妻から手紙が届いたことよって、伍との関係を断つ。卒業後、彼女は北京の中学校で教鞭を執り、同郷の曹子卿と知り合う。曹は沁珠に求愛するが、沁珠は伍との恋の傷が深かったため、拒絶し続けた。革命のために広州に行った曹は象牙の指輪を送ってきたが、沁珠の心には響かない。ひたすら求愛する曹に対し、沁珠は独身として生きる決意を告げた。元々肺に持病をもっていた曹は咯血がひどくなり、病床に伏し、亡くなってしまふ。悲嘆にくれた沁珠は、よく陶然亭の曹の墓に詣でるようになる。しかし同時に、若い男性たちと飲酒や喫煙、ダンスといった自堕落で放縦な暮らしをするようになり、ついにある日、髄膜炎で急に亡くなってしまった。<sup>(二)</sup>

盧隱自身は、この長編は高君宇と石評梅の恋をモデルにしている

と言う。伝統的な才子佳人の後追い心中のパターンを踏まえた『象牙戒指』は、単に悲劇的な感傷的な物語と片付けられることが多く、決して高く評価されていない。しかし、実はこの小説の大きな魅力は北京の風物やモダンな振る舞いにある。藤井省三氏は魯迅の『傷逝』を論じる中で、『象牙戒指』には北京やモダンな描写が多くあることに言及された。本稿は北京の風物とモダン描写を手掛かりにしてその効果を検討し、盧隱の『象牙戒指』を再読したい。

### 三 一九二〇年代の北平

沁珠と伍念秋との恋愛は北京の風物と終始関係している。伍が初めて登場したのは、沁珠が友人たちと菊を観に行った中央公園の社稷壇だった。二人の二回目のデートは頤和園、三回目は南海大園。四回目はバスで西山へ行き、最後に二人きりで会ったのは中央公園の来今雨軒だった。そこで、伍は妻子がいることを告白する。

沁珠は素文に、四回目的のデートでは町を出たけれど、行き先は頤和園ではなかったと言った。素文はすぐに西山に行ったんでしようかと反応している。なぜすぐに分かったのかと聞いた沁珠に、素文は「それはもちろん、西山は恋にふさわしい環境なのよ。美しいし、観光客が少ないし」と返事した。西山は、伍が初めて沁珠の手を握って「珠妹」と呼んだところであり、沁珠も「片足が恋の罌にはまった」と言ったところであった。西山は、二人の関係が大きく発展した場だったのである。阪本ちづみ氏は、張恨水『啼笑因縁』論で、西山は現実では見せ物として以外存在を許されなくなった「武侠」の活躍を可能にする場所でもあった、と指摘されている。妻子がい

る伍の沁珠への求愛は、北京という現実の俗世から離れた西山でようやく実現した。素文がすぐ悟ったように、西山は恋愛、そしてロマンに結びつく場としてのイメージがあったと思われる。

伍とはよく二人きりで出かけていたのに比べ、曹子卿と沁珠が二人で出かけることはあまりなかったが、やはり友人たちと共に二回西山を訪れている。曹が小説で初めて登場したのは映画館だった。映画の後、彼は沁珠と素文を東安市場の森隆飯店へ誘っている。その後、曹は沁珠と素文を誘って西山に行く。また旧曆十五日に、曹は友人二人を連れて沁珠と素文を誘い、西山に一晚泊まって月見をした。西山から帰ってきた後、寄宿舎で曹に告白された沁珠は黙ったままだった。やがて曹が咯血し病院の病床に着くようになると、曹を落ち着かせるために愛を受け入れた。曹は革命のために広州に行く前夜、変装して沁珠に別れを言いに来た。沁珠が素文に曹が送ってきた象牙の指輪を見せたのも寄宿舎である。最後に二人が出かけたのは陶然亭だった。沁珠が曹と愛を語り合う舞台はほぼ病院と沁珠の寄宿舎であった。注目すべきなのは、小説での沁珠の寄宿舎「梅窩」は、石評梅が師大付属中学校で教職についていた時の宿舍「梅窠」をモデルにしていると思われることだ。沁珠の寄宿舎「梅窩」は曹との恋愛の終始を語るための重要な舞台であった。しかし現実には、石評梅の「梅窠」での寄宿生活は一年足らずで、高君宇から象牙の指輪をもらった時にはすでに別のところに移居していた。つまり、盧隱は意図的に古い寺のような寄宿舎を二人の恋愛の舞台としたのだ。小説では、「梅窩」をあえて廃寺のように描写し、そこに入居する沁珠は自分を「禪定に入る尼」に喩えている。閉鎖的で不健康な空間で育まれる愛は、二人が最後に病で亡くなる

ことを暗示しているようである。そして、病あるいは荒廃している空間は、小説に悲哀を纏わせ、恋愛の物語に一種のロマンスを醸し出したのである。

曹が現れた後の沁珠は素文たち女友達と出かけることが多い。伍と関係を断つた後、素文は沁珠を連れて城南公園へ気晴らしに行く。協和スケート場でスケートをし、東安市場で羊の鍋を食べ、真光映画館で映画を鑑賞し、北海でボートに乗り、宣南春飯店で食事をしている。曹が亡くなって素文が南へ行った後、代わりに露莎と西長安街の西安飯店、大陸春飯店などで食事をし、ダンスホールへ踊りに行き、北海へボートに乗りに行く。これらのテキストでは、沁珠は女友達たちと北京の公共空間で自由自在に行き来し、若者たちの熱い視線を無視しながら楽しんでた。女友達との交際が多くなったのは、曹との関係に距離があつたからとも言えるだろう。

特に注意したいのは、小説で沁珠と男女の友人が入り込んでいる場所は、城南公園以外はみな上層階級しか入れない場所だったという点である。小説は一九三一年に杭州で書かれ始めたが、モデルとされた高石の恋は二〇年代である。つまり、盧隠が描いたのは二〇年代から三〇年代始め頃の北京の風物であつた。北京の公園の開放は一〇年代半ばである。中央公園や北海公園などはかつて皇室の庭園だったが、民国初期に西洋に倣って平民たちに開放することになった。しかしそこでも制限があり、経済力のない人は公園に入ることはできなかった。朱光潜は北海に行かない理由を次のように述べている。「北海でぶらつく人はフアツシヨナブルな人たちだ。彼らは皆きれいな服を着て、髪のもも顔もきちんとしている。髪のをとかしていなかったり、髭をきれいに剃っていなかったり、もしくは

はきれいな靴を履いていなかったりすると大変だ、『垢じみた姿で詩文を語る』ことすら許されていないのに、ましてや公園をぶらつくなんてとんでもない。」東安市場も民国時期に初めて現れた消費の空間である。あらゆる階級の人が出入りしていて、学生も多く、フアツシヨナブルかつモダンな雰囲気であつた。市場の出現も、経済的な条件が血縁や政治に代わって階級を分ける新しい基準となったことを意味している。これらの公園や市場などと比べ、張恨水の小説に出てきた天橋は下級の庶民階級を代表する空間である。天橋は『象牙戒指』では全く言及されていない。

作中ではしばしば「灰城」と呼ばれる北京は、高石の恋の舞台となつた都市であると同時に、盧隠自身が一人目及び二人目の夫と出会い、自分の半生を送つた都市でもあつた。『象牙戒指』は、杭州と上海で書かれたものであり、北京の地名を所々写し取っているが、古ぼけた「灰城」は小説では背景化されており、北京という街を懐かしむものではないようである。一九二六年に書かれた北京の友人たちとの書簡では、前夫郭夢良を亡くした盧隠に友人たちが北上するよう誘いかけるが、盧隠は北京に対する情は故郷よりも厚いが、所々に郭との思い出があるために、やはりどうしても行けないという心情を吐露している。つまり、北京への情が厚いからこそ、亡くした人を思い出し、ちくちくと心が痛むので、盧隠は北京にやや複雑な気持ちを抱えていた。しかし、『象牙戒指』を書いたのは二番目の夫李唯建と結婚後の一九三一年頃だった。自分より年下の彼と恋愛したために北京で注目の的となり、誹謗中傷を受け、結局北京を離れたのである。そうした中で北京という街を懐かしむことはとうてい難しかっただろう。だが、この小説が北京のロマンチックで

モダンな一面を描き出した点は否めない。むしろ盧隱は沁珠の恋愛や交友を語るために、友人、恋人と過ごしてきた青春時代の思い出を素材として掬い上げてきたと思われる。

以上見てきたように、盧隱は小説での空間を意図的に選び、作中の人物たちにモダンやロマンチックな雰囲気をもたせようとしたと思われる。小説の冒頭で、素文が「私」つまり露莎の家にやってくる、「私」はまず冷蔵庫から冷やした炭酸水を出し、また使用人に近くのホテル賓来香からアイスクリームを買ってくるように言う。素文からこの長いロマンチックな物語を聴くためには、それにふさわしいモダンもしくはロマンチックな環境とセッティングが必要だった。この冒頭の書き方と同じように、盧隱は選び取った空間を「灰城」という背景に点在させ、沁珠の悲恋の物語を語らせようとしたのである。

#### 四 「灰城」の憂鬱なモダンガール

沁珠の恋愛の悲劇を語るために空間を意図的に配置したほかに、『象牙戒指』のもう一つの魅力は主人公沁珠をモダンガールとして造型したことである。ここで特に注目したのは、ダンス、スケート及び喫煙である。

沁珠と素文が曹たちと西山へ月見に行った夜、素文は真っ黒な服装の沁珠に「黒魔舞」を踊ってくれと頼んだ。曹が蘇軾『水調歌頭』を笛でふいて歌った後、沁珠は踊り始めた。彼女がゆつくりあげた両手は「聖母が雲に漂っている前おくみを手に持って捧げているように」「石板に跪いている彼女は」「神の座の前に伏せて祈祷して

いる純潔な処女のようなようだった」。その場にいた人たちは皆聖なる洗礼を受けたような気持ちになった、と作者は書く。

「黒魔舞」という言葉はおそらく盧隱の造語だろう。黒い服を纏った沁珠は月光の下に白い顔をさらして踊る。聖なるイメージであると同時に魅惑的なシーンでもある。沁珠はここでは聖女と魔女の二面性を備えている。これは、純潔を象徴する旧道徳に基づく振舞いを思わせると同時に、誘惑的なモダンな要素も備えていることを意味しているかもしれない。

小説の後半では沁珠は日々遊びに耽り、常にダンスホールに出入りするようになる。沁珠のこの振る舞いは世間の噂になっていく。噂を聞いた露莎は学校で舞踊の授業があるからと言いつつ、当時の人たちは友人の露莎を含め、女が一人でダンスホールに常に入りすることに對し寛容ではなかったが、実は沁珠自身も同じであった。ダンスホールに出入りすることは沁珠にとって、人生を無駄にする手段であって、決して楽しむためではなかった。

次のモダンな要素はスケートである。スケートのシーンは二度ある。一度目は、素文がクラスメートの文瀾と学校のスケート場に行った時だ。冬に、学校のスケート場が開幕式を迎えると、現場でピアノの伴奏があつた。二度目は、素文が沁珠を誘って協和スケート場に行った時で、そこには若い男女が集まり、ロシアの音楽家がバイオリンを演奏していた。そこでは沁珠がぬきんでおり、蝶のように、トンボのように舞い、それに若い男たちは見惚れていた。

スケートは民国に入ってから庶民化した。北京や天津では、次々と公共のスケート場がオープンし、燕京大学や清華大学、南開大学では毎年冬になると、スケートの試合を行うようになった。当時の

新聞記事には女学生たちも試合に参加する様子が見られる。スケートは当時のモダンな男女たちが憧れるスポーツだったが、上海など南の都市ではあまり見られない、北京や天津など北方の都市で行われる独特のモダンな催しである。当時のスケート場は小説で描かれた協和スケート場と同じように、スポーツだけではなく、モダンな男女たちの社交場でもあった。その中で沁珠は最も注目されたのである。

喫煙もモダン風俗といえる。タバコを吸うことが初めて描かれたのは、曹と陶然亭から帰ってきた後に書いた日記の中であった。自分は傷だらけの少女であると書いた後に、「最近タバコを吸うことを覚えた」と書いている。二度目の喫煙は、素文を見送るために南春飯店に行った時であった。「長城のタバコを吸いながら、客を待っていた。」三度目は、露莎と大陸春飯店で、自分に気がある年下の梁自雲とその友人を待つ時に吸っていた。

女性がタバコを吸う風潮を開いたのは民国期の上海で、その後全国に及んだ。初期の喫煙者の多くは妓女であり、その後、都会の職業女性やモダンガール、さらに女学生たちにも広がった。当時も女性は喫煙しないようにという言論が大量に見られたが、女性の喫煙は広がる一方だった。女性の喫煙は新しいファッションと見られ、女性を独立させ、思想を解放する革命的行為とみなされたからだ。さらに喫煙は脱纏足、平等自由などの新思想と結びつけられることもあった。当時のマスコミもタバコを女性と関連づけており、多くの宣伝広告ではモダンな女性がタバコを吸って、女性の喫煙にまつわる誘惑的要素を強調している。

しかし、沁珠の喫煙行為には、心底からの革命精神は見えず、彼

女自身が苦しんでいる様子しか見られない。「最近タバコを吸うことを覚えた」という叙述のように、よくないことと思いつつもやはりそうするしかないという、自分でも制御できないことのように見える。

以上見てきたように、盧隱が描いた沁珠はスケート場やダンスホールに入りし喫煙する、魅力的だが一人で苦しくもがくモダンガールだった。彼女は最初の恋の失敗によって、「純潔潔白な処女」が汚されたと思いこみ、恋を恐れるようになる。しかし同時に男たちと遊び、自堕落になり、人生になげやりになったように生きる。モダンな振る舞いは男を誘惑する要素と見なされるが、その多くは彼女自身にとつては、単に自堕落の手段でしかなかった。自堕落といっても、自らの世界に完全に自分を閉じこめるのではなく、娯楽空間に入りし、人々を惹きつけ、無意識的に救いを求めていたと捉えることもできるのではないか。誘惑的でありながら、恋愛を成就させず、すぐに拒絶してしまう沁珠は、自分の日記の冒頭に赤字で「矛盾の中で生まれ、矛盾の中で死ぬ」と書き、最後に自分の預言した通りに亡くなったのである。このようなイメージは、石評梅と言えるかもしれないが、むしろ盧隱自身にも重なるところが多いと見えよう。

盧隱は『象牙戒指』は高石の恋をモデルにしていると自称している。しかし、石評梅と盧隱の親友だった陸晶清は、高君宇が石評梅に与えた影響を無視し、小説で二人の関係を単なる恋愛関係として描いたことは正しいことではないし、事実もそうではなかったと述べた。つまり、『象牙戒指』は忠実に二人の話を書いたものか、という盧隱自伝の言葉は疑わざるを得ない。曹のモデルだった高君

宇は、現実世界では共産党での重要なリーダーであり、熱血青年というべきである。彼は革命のために奔走し、過労のために肺病になって、急性盲腸炎で亡くなった。しかし、『象牙戒指』の曹にはほぼ革命の要素は見られない。盧隱は彼の咯血をしばしば書き、最終的に沁珠に拒絶されたことで咯血がひどくなり、亡くなったと示唆した。また、石評梅は高君宇が亡くなった後も「三一八事件」の中で亡くなった劉和珍のために文章を書き、教育の仕事しながら『薔薇周刊』『婦女周刊』を編集していた<sup>(三四)</sup>。小説の沁珠のように情欲に溺れ、矛盾だらけの運命の中でもがいていたわけではない。

最初の恋愛の失敗で独身を決意し、その後苦しみあまり人生に投げやりになった沁珠はむしろ盧隱自身だったというべきかもしれない。最初の夫郭夢良には故郷に妻がいた。盧隱は友人たちに反対されながらも、彼が既婚のまま結婚した。郭は一年後に亡くなったが、盧隱の親友程俊英によると、夫が亡くなった後の盧隱は、タバコや酒に溺れて泣いているばかりで、独身で過<sup>(三五)</sup>すと決意したという。二番目の夫李唯建は盧隱より十歳年下で、二人が結婚する時も世間の噂になっていた。陸品清によると、盧隱は常に人生を弄ぶことを口にするような、時代に虐待された女性であり、時代に逆らう女性でもあった<sup>(三六)</sup>。これらの評価は沁珠と重なるものである。

## 五 おわりに

悲恋小説として知られている『象牙戒指』は、実は二〇年代のモダンな北京の側面を提示したテキストとして読むことができる。生

粋の北京の作家たち、例えば老舍と異なり、『象牙戒指』では下町の風景は全く無視され、ひたすらそのモダンな一面が描かれている。一九二八年、北京は北平と改名され、都から地方都市となった。一九三〇年頃に南へ下った作家たちは昔を懐かしむ視線で北京を書いたが、盧隱の態度はそれとも異なっていた。彼女の描く北京は「灰城」と呼ばれ、まさに色鮮やかな恋愛物語を描くためのキャンバスではない。盧隱は北京の風物を作品に点在させ、ロマンを醸し出すためのセッティングとして扱った。

ダンス、アイススケート、喫煙などは、沁珠をモダンガールとして造型した。身に付けたモダンガールの振る舞は、沁珠に誘惑的な要素を与えると同時に、自堕落な手段となったようだが、無意識の中で救いを求めていたシグナルとして捉えることもできるのである。人々の注目を惹きつける一方で、拒絶し続ける。このような沁珠は石評梅をモデルにしたと言われるが、むしろ盧隱自身の影を落としていると言える。沁珠に見られる誘惑と拒絶の繰り返しのパターンは、『象牙戒指』以前の作者自身をモデルにした作品にも数多く見られる。今後さらに深く掘り下げていきたい。

### 《注》

- (一) 王国棟「盧隱正傳」『盧隱全集』巻六（王国棟編、福建教育出版社、二〇一五年九月）一七二—一七三頁。
- (二) 『盧隱全集』巻四（王国棟編、福建教育出版社、二〇一五年九月）二〇三頁。
- (三) 盧隱「象牙戒指」『盧隱全集』巻四（王国棟編、福建教育出版社、二

- 〇一五年九月）二九—二〇三頁。
- (四) 藤井省三「魯迅恋愛小説における空白の意匠…「愛と死(原題…傷逝)」と森鷗外「舞姫」との比較研究」『東方学』一二五輯、二〇一三年一月、一一—二〇頁。
- (五) 同注三、六二—六四頁。
- (六) 阪本ちづみ「都市小説として『啼笑因縁』を読む」『張恨水の時空間——中国近現代大衆小説研究』(勉誠出版、二〇一九年三月)一九頁。
- (七) 『石評梅全集』(山西出版社、二〇一四年八月)、五九三頁。
- (八) 同注三、七六頁。
- (九) 王煒、閻虹編『老北京公園開放記』(北京·学苑出版社、二〇〇八年九月)五頁。
- (一〇) 朱光潛「後門大街」『北京乎·現代作家筆下的北京(一九一九—一九四九)』下(姜德明編、生活·讀書·新知三聯書店、二〇〇五年)四六八頁。
- (一一) 王建偉「民国北京城市消費的等級與階層」『中国高校社会科学』二〇一六年六月、一二五頁。
- (一二) 盧隱「寄燕北故人」『盧隱全集』卷二(王国棟編、福建教育出版社、二〇一五年九月)二二四頁。
- (一三) 同注三、三〇頁。
- (一四) 同注三、一〇五頁。
- (一五) 同注三、一八九頁。
- (一六) 同注三、一一三頁。
- (一七) 付俊良「期刊視野下的民國冰雪運動——基於『民國時期期刊全文數據庫(一九一一—一九四九)』的考察」『冰雪運動』二〇一九年第三期、七八頁。
- (一八) 王建偉「冬日溜冰·古都青年的“摩登”生活」『北京檔案』二〇一九年第二期、四八頁。
- (一九) 同注三、一三八頁。
- (二〇) 同注三、一七二頁。
- (二一) 欒芳、劉陽河「中国近代女性吸紙烟狀況研究」『重慶師範大學學報(社會科學版)』二〇二二年第二期、九九—一〇五頁。
- (二二) 同注三、一九五頁。
- (二三) 楊揚「探求光明的心聲——略論石評梅的散文」『北京圖書館同人文選』一九八九年、四七五頁。
- (二四) 徐士瑚「石評梅與高君宇」『山西大學學報』一九八五年第三期、七七—七八頁。
- (二五) 程俊英「回憶盧隱二三事」『新文學史料』一九八七年第一期、八四頁。
- (二六) 陸晶清「代序二 繁華紅塵任逍遙」(盧隱著『春愁何處是歸程』西安·陝西師範大學出版社、二〇〇八年二月)四頁。

